
組織に追われる者

s herry

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

組織に追われる者

【Nコード】

N7915H

【作者名】

sherry

【あらすじ】

工藤新一を江戸川コナンにして、辛い思いをさせてしまった事に対して責任を感じている灰原哀。その灰原哀と、その他の登場人物の視線で書かせて頂きました。

FILE 1 地下室にて

哀は、早朝からパソコンと向き合っていた。

『後もう少し・・・もう少しで・・・』

哀は、頬を伝う汗をぬぐった。

カタ、カタ、カタ、カタ・・・

地下室には、キーボードを打つ音がひびいている。

『よし！・・・やったわ！遂にやった！』

今、哀の気持ちは達成感でいっぱいだった。

『やっと・・・やっとここまで・・・』

達成感と同時になぜか、眼の奥が熱くなった。

暖かいものが頬を伝う。

『何で？・・・何で、涙が・・・』

哀は、もう、自分をコントロールできなかった。

『何で？何で・・・こんな・・・これが望んでいた事じゃないの？』

自分に問うてみる。

『ねえ・・・志保。これが、あなたの望んだ事じゃないの？望みが
なかったのに、どうし

て・・・涙なんか・・・』

いくら自分に問うてみても、答えは見つからなかった。

哀は誰にも気付かれずに1人、地下室で孤独を感じながら、押し寄
せてくる涙に身を任せた。

FILE 1 地下室にて（後書き）

こんにちは、sherryです。

小説を書くのは、初心者なので、読みづらかったり、誤字脱字があるかもしれませんが、その時は、ご指摘よろしくお願いします。

小説は、灰原哀の視点で書いていこうと思っています。

FILE 2 呼び出し

次の日、哀は博士と自分の朝食を作るために、6時30分に目を覚ました。上着を掴み、

キッチンのほうへ向かう。

「今日の朝食は何にしようかしら？」

小さく呟いてみる。無意識のうちに上着のポケットに両手を入れた。ポケットの中には、昨日

完成したばかりの薬が入っている。

『これで本当に良かったのかしら』

哀は、薬を取り出していった。ハアとため息をつき、薬をポケットの中に戻す。

『今は薬より、博士の朝食を作らなくちゃね』

深呼吸をすると、哀は朝食の支度に取り掛かった。

午前10時。哀は、電話の前に立っていた。

『今日は、日曜日なので、工藤君は探偵事務所にいるはず』

そう思って、哀は受話器を握り、探偵事務所の電話番号を押した。
いつもなら、工藤新一用の

携帯電話にかけるのだが、工藤新一用の携帯も、江戸川コナン用の携帯も、調子が悪く、

「しばらく携帯に電話をかけないでくれ」

といわれていたのだ。

「はい、毛利探偵事務所」

受話器の向こうから、毛利探偵の声が聞こえてくる。

「もしもし、灰原哀ですけど、江戸川君いますか？」

哀は、出来るだけ子供っぽい話し方をまねた。

「・・・あ、ああ。ちょっと待ってくれ」

毛利探偵は、少しがっかりしたような声を出すと、大声でコナンを呼んだ。

「よう、灰原。どうした？」

受話器の向こうから聞こえていたのは、江戸川コナンの声だった。

「今すぐ、博士の家に来てくれない？」

哀は、毛利探偵のときとは、似ても似つかぬ声を出した。

「あ、ああ。いいけど・・・」

「じゃあ、10分後、博士の家へ来てね」

「お、おい。灰原！」

コナンの声が聞こえたが、それを無視して、哀は、電話を切った。

FILE 2 呼び出し（後書き）

書き方が下手ですみません。何かお気付きのことがありましたら、
どうぞご指摘お願いします。

FILE 3 解毒剤

〓10分後〓

哀が、ソファ―で雑誌を読んでいると、

「灰原、いるか？」

と、コナンの声が聞こえてきた。哀は、深呼吸をすると

「こっちよ」

と返事をした。

「どうしたんだよ、急に」

哀は、コナンの質問には答えず、黙ってポケットから昨日完成させたばかりの薬を取り出した。

た。

「お、おい。まさか・・・これって・・・」

コナンは、その薬を手にとって信じられないものを見ているような顔をした。

「ええ、そのまさかよ。APTX4869の完全なる解毒剤がついに完成したの」

哀のことばにコナンの表情は、ぱっと明るくなった。

「じゃあ、俺・・・」

「ええ、元の体に戻るわ。そして、もう二度と、江戸川コナンになることはないでしょう

ね」

目の前で喜んでいるコナンとはうらはらに、哀は心の中で深くため息をついた。

『工藤新一に戻ったら、彼は私ではなく、毛利蘭のほうへ行く』

哀は、泣きそうになるのを必死でこらえた。自分にはどうしようもない現実だった。

「おい・・・灰原？」

コナンは、灰原の異変に気付き、首をかしげた。

「なんでもないわ。早く博士と相談して、小学校をやめなくちゃいけないでしょ。博士なら今

散歩に出かけているけど、もうすぐ戻ると思うわ」

哀は、コナンの顔を見られなかった。泣きそうになっている自分の顔を雑誌で隠した。

「あ、ああ」

コナンもそれ以上は追求せずに、キッチンのほうへ向かった。

『私は今までずっとあなたのそばにいた。ずっとあなたを見てきた。あなただけを見てきた。』

でも、あなたはいつも蘭さんの事ばかり気にしていたわね。蘭さんだけを見ていた。どうして

私ではいけなかったの？ どうして私はあなたと結ばれるのを許されなかったの？・・・工藤君』

哀は、キッチンのテーブルに座っているコナンを見た。その哀の眼には、光るものがあつた。

FILE 3 解毒剤（後書き）

更新しました！！灰原さんが、とても哀しい展開になってしまいました。かわいそうな灰原さんは、この後どうなってしまうのでしょうか。

次回、お楽しみに！！

（ご指摘、何かありましたらお願いいたします。）

FILE 4 相談

「ただいま、哀君。」

玄関から博士の声が聞こえた。

「お帰りなさい、博士。工藤君、来てるわよ。」

哀は、博士に散歩へ行く前に解毒剤のことを話していた。

「おお、そうか。」

博士は、コナンの姿を見つけ、キッチンへ行った。

「よう、博士。」

コナンは短く挨拶をする。博士は、息子を見るような眼で微笑むと、

「で？どうするんじゃない？新一」

と本題に入った。

「大体、一週間後ぐらいがいいんじゃないかねーか？」

コナンが、意見を言う。

「お、おお。そうじゃのう」

博士も納得する。コナンは振り向くと

「おい！灰原！」

と、大声で哀を呼んだ。

「・・・何？」

哀は、雑誌で顔を隠したまま聞いた。

「オメーはどうするんだよ？オメーは元の姿にもどらねーのか？」

「・・・そうねー。あなたが高校生に戻ってから、1，2ヶ月位経ったら、ってところかしら？」

哀は、コナンが首をかしげたのが、雑誌から顔を上げなくても分かった。

「何だよ？どうせ元に戻るんなら、二人一緒に・・・」

「バカね」

コナンの言葉をさえぎるように哀は、言った。

「考えて見なさいよ。学年で、成績トップの二人が一度に転校している事が組織にばれたら、

不審に思うはずよ。そして、灰原哀と江戸川コナンがどこの小学校に行ったのかを突き止めよ

うとしても、どの小学校にも名前がない。そうなれば、正体がばれ

るのも時間の問題でしょう

ね。・・・本当は、1，2ヶ月でも短すぎるぐらいでしょうけど・・・」

哀の言葉に、コナンは言葉を失った。

FILE 4 相談（後書き）

期末テストが近いので、しばらく、更新できません。その間に気づいた事がありましたら、ご指摘、お願いします。

FILE 5 別れ

「えーっと、今週いっぱい、江戸川君が転校する事になりました」
1年B組で、小林先生が俺の転校を発表した。

「えー!!」

みんなの驚きの声上がる。

「・・・ねえ、何で転校しちゃうの？コナン君？」

歩美が目には涙を浮かべながら聞いてきた。

「わりーな、歩美。親の都合で、どうしても転校しなくちゃいけないくってよ」

俺はうそをついた。本当のことを言うと、少年探偵団のみんなには、うそをつきたくなかった。

た。出来ればこいつらだけにでも、本当のことを言ってやりたかった。

「じゃあ、何でもっと早く教えてくんなかったんだよ！コナン！」

「そうですよ。僕たち、同じ少年探偵団なのに・・・」

元太と光彦が、言葉をぶつけてくる。

「わりい。急に決まったんだよ」

今、俺に出来る事。それは、謝る事だった。

『江戸川コナンとして、こいつらと一緒にいられる時間は、もうほとんどない。』

それは、完全な解毒剤を渡されたときから、ずっと心にあった思いだ。

放課後、俺はいつもと同じように少年探偵団のメンバーと帰った。

「本当に転校しちゃうのかよ？」

元太のこの質問は、さっきから10回ほど聞かされている。

「ああ」

その度に俺は答えた。

「たまには、手紙ちょうだいね」

「ああ、そうするよ」

歩美の願いは、そのまま受け入れた。

「もちろん、全員にですよ！」

光彦が念を押す。

「おいおい、まさかクラスの全員に一人ひとり書けって？」

「違いますよ。・・・まあ、それが出来たら、みんな喜ぶと思いますが・・・僕たち、少年探偵団

に、ですよ」

「分かったよ。じゃあな」

いつも、俺は一人、探偵事務所のほうへ向かった。そして、事務所の近くにある公衆電話で、

蘭に電話をかける。

「はい、毛利探偵事務所」

いつもどおり、欄が電話に出る。

「よう、蘭。久しぶり！」

「新一！？どうしたのよ！連絡もしないで！！」

いつもどおり、まずお叱りを受ける俺。

「わりー、わりー。実はな、追っていた事件が片付いて今週末にも、帰れそうなんだ。」

「ほんとに!？」

「ああ」

蘭の喜んでいゝ顔が目に見え。そんな蘭に、これからコナンのことを話さなければならぬ。と思うと、少し心が痛んだ。

「ぜったいだよ！」

蘭は念を押す。

「ああ、絶対だ」

俺はそういふと電話を切った。そして、探偵事務所への階段を駆け上がる。

「ただいま、蘭姉ちゃん」

俺は、電話のときとは違い、トーンを低めにして、言った。

「どうしたの？コナン君」

「実は・・・今週末に、僕のお母さんが迎えにくるんだ。これから一緒に暮らすんだって」

蘭の表情を見たくなかった。でも、否が応でも目に浮かんでくる。ついさっき、良いニュース

が流れてきたと思えば、今いやなニュースを聞くはめになったのだ。

「・・・そうなんだ・・・」

蘭の声も、低くなっている。

「じゃあ、もうすぐお別れだね・・・」

蘭のこの声は知っている。必死で涙をこらえているときの声だ。

「・・・うん・・・」

「お母さんが迎えに来るまで、甘えて良い？」

なんて聞いたら、ますます別れがつらくなる事ぐらい分かるので言わなかった。

「じゃあ、今日はコナン君の好きなもの作ってあげるからね。何が良い？」

蘭は、必死で普通に振舞おうとしている。

『だったら俺も、普通にしなくちゃダメだな』

「僕、ハンバーグが良い。蘭姉ちゃんのハンバーグ、とっても美味しいんだもん」

「本当に!?!じゃあ、今日ハンバーグにしようか?」

「やったー!!僕、手伝う!!」

「うん。よろしくね」

今は、江戸川コナンとして、蘭のそばにいてやりたいという気持ち
が、とても大きかった。

FILE 5 別れ（後書き）

やっとテストが終わって書けるようになりました！！書きたいとず
っと思っていたので、予想より長くなってしまいました（すみませ
ん）。

FILE 6 真の姿で・・・

今日は解毒剤を渡される当日である。俺は朝食を済ませ、急いで博士の家へ行った。

「灰原！」

「随分と慌ててるのね。挨拶もせずにドアを開けるなんて・・・」

灰原は皮肉たっぷりの目線を俺に投げかける。

「いいじゃねーか。別に・・・それより解毒剤は？」

灰原はため息をひとつつくと、ポケットからカプセルを取り出した。

「これよ。これで、完全に工藤新一の体に戻るわ」

「サンキュー」

俺は解毒剤を受け取ると、トイレに入った。

『これで、やつともとの体に戻る・・・』

俺は覚悟を決めると、カプセルを飲み込んだ。

「わああああああ!!」

「灰原、どうだ？」

久しぶりにもとの体にもどった。気分は快晴だった。

「あら、工藤君って、こんな姿だったっけ？」

「おめーな。もう少しその口どうにかなんねーか？」

「無理ね」

あっさり言われ、なぜか拍子抜けする。

「でもよー。もう少しお世辞でもいいからいえねーか？」

「うわー、とつてもかっこいい。私、一目ぼれしちゃったかもー・
・これでいい？」

「おめーな・・・」

ハアとため息をつき、

「行ってくる」

と言うと、俺は毛利探偵事務所へ向かった。そして、蘭に電話をかける。

ルルルル・・・ルルルル・・・ガチャ

「よお！蘭、今探偵事務所に向かっているんだけど・・・」

「・・・工藤新一か？」

その声をきいて、俺は背筋に冷たいものを感じた。

『ジン』

「まさか、生きていたとはな・・・この娘は我々が預かった。この娘を返して欲しかったら、一時

間後、一人で杯戸シティホテル、302号室へ来い。もし来なかったら、この娘の命はない」

電話は一方的に切られた。

『くそっ！何で俺が生きている事がばれたんだ！』

俺はその場に立ちつくした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7915h/>

組織に追われる者

2010年11月9日05時29分発行